慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本企業におけるCIOの現状に関する分析と考察
Sub Title	
Author	鈴木, 慶(Suzuki, Kei) 清水, 勝彦(Shimizu, Katsuhiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2018
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2018年度経営学 第3445号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002018-3445

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（　　2018　年度）

論文題名

日本企業における CIO の現状に関する分析と考察

主　査	清水 勝彦
副　査	林 洋一郎
副　査	大藪 毅
副　査	

氏　名	鈴木 慶

論 文 要 旨

所属ゼミ	清水 勝彦 研究会	氏名	鈴木 慶

（論文題名）

日本企業における CIO の現状に関する分析と考察

（内容の要旨）

近年、日本企業における IT を取り巻く環境は大きく変化を続けている。デジタル化の進展に伴い、経営上における IT の存在感や重要性の高まりが叫ばれる中、日本の大企業を取り巻く IT 投資の現状に対する関心や懸念を出発点に、本研究は開始している。

そこで、本研究では、情報部門の観点から経営レベルで意思決定を行う存在である、「CIO」(Chief Information Officer)に着目する。CIO とは、情報システムや情報部門を統括する役員レベルの責任者を指す。日本企業の CIO 設置率は、諸外国と比較して低い水準である事を問題視する議論が旧来より存在している。そこで、本研究では、近年における日本企業の CIO に関する現状について分析と考察を実施する事とした。

設定したリサーチクエスチョンの検証のためにインタビューを行う中、筆者は企業ごとの CIO の職務目的や IT 戦略の方向性に様々な違いが存在する事に気がついた。これまで、CIO は一義的な定義を前提に議論される対象であったが、CIO と呼ばれる存在の中にも、異なるタイプが存在するのではないかという新たな疑問を持つこととなった。そこで、「現代における日本企業の CIO とは一体どの様な存在なのか」と言うリサーチクエスチョンを新たに再設定し、インタビュー内容の分析と考察を再実施した。

結果、日本企業における CIO の大きな傾向として「攻めの IT」を重視する CIO と、「守りの IT」を重視する CIO、二つのタイプの CIO が存在する可能性が見受けられた。業務効率の改善やコスト削減など、従来的な考え方の IT 投資を重要視する CIO が存在する一方で、テクノロジーの進展に伴う競争環境の変化対応に向け、自社事業の収益拡大や競争力強化を重要視する CIO も存在することが、インタビュー分析の中で明らかになった。

以上の分析を踏まえた、本研究における考察と示唆は大きく以下の二点である。

①「企業における IT 戦略の方向性」と「CIO タイプ」のマッチングは極めて重要である。CIO の選定に際し、「攻めの IT」か「守りの IT」かと言った、自社の IT 戦略の方向性に適合するタイプの CIO を、企業側は注意深く見極め、選任することが極めて重要である。

②これまで、「CIO に求められる経歴」や「CIO に必要とされる知識体系」など、CIO に関する様々な議論が存在してきた。しかし、今後は、企業業績への貢献アプローチが異なる「攻めの IT」タイプの CIO と、「守りの IT」タイプの CIO の存在を踏まえ、それぞれの観点から、より粒度の高い議論を行っていくことが重要である。

以上